

## 『清書対音協字』における漢字音 (1)

鋤 田 智 彦

### 1. はじめに

本稿で取り扱う『清書対音協字』は17世紀後半から末の刊行と考えられ、満洲文字により漢字音を体系的に示した資料としては比較的早期のものであると言える。『清書対音協字』に見られる漢字音について、岸田 (1994)、山崎 (1995) あるいは中村 (2004) などでは他の満洲語資料における漢字音と対比する際に部分的にそれを参照しているが、『清書対音協字』に収録された個別の字に対しては全面的な研究が行われていない。そこで本稿では明末北京語音を表す資料である『合併字学集韻』(徐孝, 1602) 及び南京音を表す資料『西儒耳目資』(金尼閣, 1626) との対比を中心とし、その他に適宜『中原音韻』、『四声通解』など他の近世北方語資料及び『御製増訂清文鑑』に見られる漢字音などについても触れつつ、声母、韻母及びその他の観点から『清書対音協字』に見える漢字音がどのような特徴を持っているか明らかにする。

### 2. 『清書対音協字』について

『清書対音協字』(manju -i acanara btihe<sup>1)</sup>、以下『対音協字』)は上巻の『清書対音』、下巻の『清書切音』からなる書籍である。書中に序文等はなく、刊行年代の特定は難しい。Fuchs (1936) では、根拠を示さないながら、順治から康熙初期の資料と判断している。中村 (2004) では『新刻清書全集』全5冊のうちの1冊として『対音協字』の存在に触れており、『新刻清書全集』の汪鶴孫<sup>2)</sup> 序が康熙38年 (1699) であることから、『対音協字』はそれ以前に成立したとみている。また、Saarela (2020) によれば編纂には凌紹雯と陳可臣の2名が関わっていたという。そのうち凌紹雯は満洲語に通じており、編纂の中心人物とみられる<sup>3)</sup>。『対音協字』ははじめに満洲文字により漢字音を表し、その下にその音で表される漢字が列挙される。声調

---

1) 本稿におけるローマ字転写はMöllendorff (1892) に以下の4点の改変を加えた方式で行う。1. 漢語音節表記用の附加記号を「から」とし、2. 独立した音節をなすdzをdzy、ts'をtsyとし、3. 子音字ts', c'を取り去り、4. 日本語の「～の」に当たるiを-iと表記する。

2) 汪鶴孫は『皇朝詞林典故』(嘉慶10年, 1805序)に康熙癸丑(12)年(1673)の進士として「字梅坡。浙江錢塘人」と載る。また、『晚晴簃詩匯』(徐世昌編, 民国18年, 1929)には「字雯遠, 錢塘人。康熙癸丑進士, 改庶吉士。有『延芬堂集』」とある。

3) 凌紹雯は浙江仁和人。明崇禎16年(1643)生まれ, 康熙52年(1713)卒。王士禛『居易錄』(卷11)に「殿試策例有規式, 違式輒不得与上第, 康熙戊辰, 仁和凌紹雯少習清書, 殿試對策, 遂用清書漢書兩體寫之, 誦卷官奏請上裁, 置二甲之末」とある。

に対する表記は見られない<sup>4)</sup>。『清書対音』、『清書切音』というそれぞれの巻名は満洲文字による注音法に基づく。すなわち「対音」というのは満文十二字頭をもってそのまま表すことのできる音節により表記されるものであり、na「納」、hai「海」、dung「東」などがそれである。一方の「切音」というのは二つの音を組み合わせせて作り出されるものである。例えばniとyangからなるniyang「娘」、ciとyeiからなるciyei「切」、suとwanからなるsuwan「算」などである。『清書対音』には327音節2611字、『清書切音』には130音節650字収めており、全体では457音節3261字が収録されている<sup>5)</sup>。満洲字の排列は基本的に十二字頭による。すなわち、まずは母音をa, e, i, o, u (ü) の順に並べ、次に音節頭子音をこれと組み合わせるものである。音節頭子音の並びはn, h (-a, -o, -ü)<sup>6)</sup>, b, p, s, š, t, d<sup>7)</sup>, l, m, c, j, y, k (-e, -i, -u), g (-e, -i, -u), h (-e, -i)<sup>8)</sup>, k' (-a, -o), g' (-a, -o), f, w, ts, dz, žそしてši, cy, jy, syの順である。これは『大清全書』(1683)に見られる順序と共通点が多い<sup>9)</sup>。それとの違いは多く外字(tulergi hergen)に見られる。すなわち、『大清全書』ではsaの中にsyを入れたり、sanの中にdzanを入れたり、また、jiの中にjyを含めている。これに対し、『対音協字』ではg', k'以外の外字をおしなべてwの後に続けている。これは『大清全書』が満洲語語彙を収めた辞書であり、外字の比率が低いのにに対し、『対音協字』は一種の音節表であり外字の比率が『大清全書』に比べて高く、体系的に現れるためであるためと考えられる。さらに母音であるiが後続したai, ei, ui (üi) と先の音節頭子音の順序で組み合わせたり、子音であるnが後続したan, en, in, un (ün) と音節頭子音の組み合わせ、ngが後続したang, eng, ing, ung (üng) と音節頭子音の組み合わせ、oが後続したao, eo, io, oo, uoと音節頭子音の組み合わせの順に並び、続けてlが後続したel(「而」など)が配置される。ここまでは音節末音の順序は『大清全書』と同じである<sup>10)</sup>。『対音協字』では続けてioi, iongを載せている。これはいずれも固有語には現れず、漢語音表記にのみ用いられる綴りなので、後ろに置いたのであろう。ここまでが「切音」の音節掲載順である。「切音」部分については、yで始まるya, yai, yan, yang, yei, yo, yoo, yünを先に載せ、続けてwで始まるwa, wai, wan, wang, we, wei, wenがこの順に並ぶ。このように見てみると、『対音協字』における音節の排列は漢語の音韻学の見地に基づいたものではなく、満洲語の音韻に基づいたものであるということが出来る。

4) 例えばtungという音を持つ漢字として「通痛桶同統銅桐童僮筒」の10字が挙げられているが、それぞれの声調は「平去上平去平平平平」であり、声調による排列とは言えない。他も同様である。

5) この数は延べ数であり、実際には同一の漢語音節を「切音」「対音」の2種類で収めていたり、同一の漢字に対して複数の音を示している例も見られる。具体的な例については本文にてその都度言及する。

6) k (-a, -o, -ü) とg (-a, -o, -ü) は漢字音表記には用いられない。『大清全書』では三つの子音字が一組として母音字が続き、ka, ga, ha, ko, go, ho, kū, gū, hūの順に並べられる。

7) tとdについては、二つの子音字が一組として扱われ、ta, da, te, de…の順に現れる。

8) huという綴りは漢字音表記には用いられない。漢字音を表す際にはg, kにはuのみが、hにはüのみが後続する。

9) 『大清全書』における排列順については早田・寺村(2004:16)を参照。

10) 一口に十二字頭というが、音節末音については資料によりその順序が異なる。例えば『大清全書』では多くo, i, n, ng, o, r, k, t, s, b, l, mの順に並べられるが、『正字通』所載の『十二字頭』(康熙9年, 1670)ではo, i, r, n, ng, k, s, t, b, o, l, mの順であり、また『清文彙書』(乾隆25年, 1751)では多くo, i, r, n, ng, o, k, s, t, b, l, mの順である。「多く」と述べたのは『大清全書』『清文彙書』では同一書中において順序が入れ替わっている箇所があるためである。

### 3. 声母について

『対音協字』に見られる声母は以下の19類である（//の中は音韻表記，その右は例字及びその満洲文字表記）。

/p/ 巴ba	/p'/ 平ping	/m/ 木mu	/f/ 非fei
/t/ 多do	/t'/ 通tung	/n/ 難nan	/l/ 来lai
/k/ 耕geng, 高g'ao	/k'/ 気ki, 科k'o	/x/ 好hao	
/ts/ 蔵dzang, 精jing	/ts'/ 曹tsoo, 七ci	/s/ 三san	
/tʂ/ 張jang	/tʂ'/ 超cao	/ʃ/ 山šan	/z/ 如zu
/Ø/ 安an, 牙ya, 王wang			

満洲文字による表記上の特徴として，/k, k'/では後続する母音字がa, o以外の際はg, kが用いられ，後続する母音字がa, oの時はg', k'が用いられることが挙げられる。また，/ts, ts'/においても後続する母音字によりそれぞれ2種類の満洲文字が使われる。すなわち，後続する母音字がi以外の場合はdz, tsが先立ち，iの場合はj, cが先立つ。それ以外は一つの満洲文字が一つの漢語声母に対応する。以下に具体的な声母に対する表記についてみてみたい。

#### 3.1. 尖団音について

近世中国語音史における大きな問題の一つは尖団音についてと言っている。『対音協字』を見てみると，尖団音がはっきりと区別される。これは同時期の満文訳白話小説『満文金瓶梅』（康熙47年，1708序）にみえる漢字音表記と共通する特徴である。一方，初期の有圈点満文資料である『太祖武皇帝実録』（崇徳元年，1636告成）や『満文三国志』（順治7年，1650序）などではこれと異なり，中古精清従母および中古見溪群母由来の諸字はそれ以前から満洲語に伝わっていたいくつかの語を除いていずれもji-, ci-と表記され，中古心邪母及び中古曉匣母字についてはその由来にかかわらずsi-, hi-が共に用いられている<sup>11)</sup>。また，これより下った『兼滿漢語満洲語套話清文啓蒙』（乾隆26年，1761）では一部の尖音字にgi-, ki-, hi-が用いられ，同様に一部の団音字にji-, ci-, si-が用いられるなど，尖団の区別が失われ始めたことがわかる。この状況を表にまとめると以下のようになる。

表1 満洲資料における尖団音字に対する表記

資料	有圈点初期資料（～1650）	『対音協字』（1699以前）	『清文啓蒙』（1761）
尖音字	ji-, ci-, si-/hi-	ji-, ci-, si-	ji-/gi-, ci-/ki-, si-/hi-
団音字	ji-, ci-, hi-/si-	gi-, ki-, hi-	gi-/ji-, ki-/ci-, hi-/si-
特徴	破擦音は区別し，摩擦音は区別がなくなりつつある。	はっきりと区別する	全体的に区別が無くなりつつある

11) このような状況に対し，山崎（1990）では摩擦音についてはsi-, hi-がその由来にかかわらず混用されていることから一部で合流が始まっていると分析し，破擦音については尖音字と団音字は共にji-, ci-という満洲字を用いているものの，尖音字においてgi-, ki-が現れないことからその区別は保たれており，尖音字に対するji-, ci-は [tʂi-], [tʂhi-] であり，団音字に対するji-, ci-は [tʂi-], [tʂhi-] であったと判断している。

初期有圈点資料における状況は他の同時期の資料と比べると特殊であるといえるが、これはそれらが依拠したのは北京音あるいは南京音ではなく、女真人の接触した遼東半島の方音であったためと考えられる<sup>12)</sup>。尖団音字について陳暁（2013:26）では、本土資料と満洲資料、朝鮮資料の状況から、「尖団の区別は、清代の前半（18世紀中葉）まで明らかに保たれていたが、18世紀中葉から、いくつかの尖音団音が混同され始め、19世紀前半までには尖音団音は統合が完了していたと言うことができる」と結論づけている。そのようなことから、『対音協字』に見える尖団音の区別は実際の音に基づくものであると判断される。さらに時代の下った『音韻逢源』（道光20年、1840）では、やはり『対音協字』と同様に尖団音をはっきり区別しているが、これは明らかに人為的な作業の結果によるものである。

### 3. 2. 知二莊組字

現代北京語では、知組二等及び莊組字は多く知組三等及び章組字と共に反り舌音で発音されるが、一方で精組字と同様に非反り舌音で発音される字も少なからず見られる。ここではそれらの字について見てみたい。

#### 3. 2. 1. 知二莊母字<sup>13)</sup>

ここには知二莊母字でありながら満洲文字でjと表記されない、あるいは現代北京語で反り舌音として発音されない字、および個別に例外的な対応を見せる「臻」を取り上げる<sup>14)</sup>。

表2 知二莊母字（その1）

漢字	中古声母	対音協字	合併 <sup>15)</sup>	西儒 <sup>16)</sup>	清文鑑 <sup>17)</sup>	現代北京音
(1) 側	莊	je	tʂɛ, tʂai	tʂɛ?	dze, tse	ts <sup>h</sup> ɛ
(2) 責	莊	je	tʂɛ, tʂai <sup>18)</sup>	tʂɛ?	dze	tsɿ
(3) 沢	澄二(仄)	je	tʂɛ	tʂɛ?	je, dze	tsɿ
(4) 扱	澄二(仄)	je	tʂɛ	tʂɛ?		tsɿ

(1)「側」は『広韻』では職韻の、(2)「責」は麦韻の莊母字であり、(3)「沢」、(4)「扱」は共に陌韻の知二母字である。これらは『対音協字』のみならず『合併字学集韻』でも反り舌音として同音であり、『西儒耳目資』では非反り舌音として同音である。『御製增訂清文鑑』では出現のない「扱」を除いてdzeという音が見られ、現代語に共通する特徴が見られる。一方で「沢」にはjeも見られるなど、交替の段階にある姿を見ることが出来る。「側」のtʂɛという音も現れ始めている。

表3 知二莊母字（その2）

漢字	中古声母	対音協字	合併	西儒	清文鑑	現代北京音
(5) 臻	莊	jin	tʂən	tsən, tʂin		tʂən
(6) 臻	莊	dzen	tʂən	tsən, tʂin	jen	tʂən
(7) 蔡	莊	dzen	tʂən	tsən, tʂin		tʂən

12) 初期有圈点資料においては尖団音字の他にもいくつかの際だった特徴が見られる。『満文三國志』における漢字音については鋤田（2015）を参照。

13) ここで提示する声母には清音化した中古濁音声母を含む。

14) 以下満洲字のローマ字転写については表題及び表中の表記を除いて下線を加えて表す。

15) 表中では『合併字学集韻』を「合併」と表す。再構音は耿振生（1992）による。

16) 表中では『西儒耳目資』を「西儒」と表す。再構音は叶宝奎（2001）による。

17) 表中では『御製增訂清文鑑』を「清文鑑」と表す。

18) 「責」におけるtʂaiは「債」としての用例である。

(5)「臻」は『対音協字』では「鎮」などと同様にjenと表記されるか、あるいは非反り舌音のdzenと表記されることが想定されるが、実際には「進」「津」などと同音字としてjinという音に収めている。jinという綴りがjenと混用される例は初期の有圈点資料でもいくつか見られるものである<sup>19)</sup>。ただ、時代が下り、漢語音に慣れたと考えられる『対音協字』では珍しい。ここでは「臻」をjinと表記していることから、この字を反り舌音として認識していたことが想定できる。一方、『広韻』でそれと同音である(6)「榛」、(7)「藜」は『対音協字』ではdzenと非反り舌音として収めている。『合併字学集韻』では3字ともtʂənと章母字「真」、知三母字「珍」等と同音であるが、『西儒耳目資』ではそれと異なり、「臻」「榛」「藜」を「真」「珍」と同じくtʂinと収める一方、同時に莊母由来の「臻」「榛」「藜」のみを非反り舌音であるtsənとしても収めている。この2音はすなわち莊母と知三章母の区別によるもので、『西儒耳目資』では反り舌音である北京音と非反り舌音である南京音を共に収めたためであるといえる。『対音協字』のjin (jen), dzenという二つの表記もこれと同様に異なる地域の音を収めたものであろう。後の『御製増訂清文鑑』ではここで取り上げた中古莊母字3字のうち「榛」のみ現れ、jenと表記される。

表4 知二莊母字 (その3)

漢字	中古声母	対音協字	合併	西儒	清文鑑	現代北京音
(8) 鄒	莊	dzeo	tʂəu	tsəu, tʂəu		tsou
(9) 縐	莊	dzeo	tʂəu	tsəu	dzeo, jeo	tʂou
(10) 皺	莊	dzeo	tʂəu	tsəu	dzeo, jeo	tʂou

(8)「鄒」は莊母字であるが、『対音協字』および現代北京語共に非反り舌音である。『合併字学集韻』では(8)「鄒」は章母字「周」「舟」などと同じくtʂəuでありそれと異なる。一方『西儒耳目資』では(8)「鄒」は精母字「緞」と同音であるtsəuおよび「周」「舟」と同音であるtʂəuの2音を載せている。(5)「臻」と同様の状況を表しているといえることができるだろう。しかしながら(9)「縐」、(10)「皺」は(8)「鄒」と異なり、tsəuのみを載せておりtʂəuは見られない。『御製増訂清文鑑』では共にdzeo, jeoが現れ、いずれもdzeoの出現回数が多い。さらに『語言自邇集』(1886)を見てみると、「鄒」のみtsouであり、「縐」「皺」はいずれもtsou, chouの2音を載せている。このように、この3字については音の揺れが大きい。

表5 知二莊母字 (その4)

漢字	中古声母	対音協字	合併	西儒	清文鑑	現代北京音
(11) 争	莊	dzeng, jeng	tʂəŋ	tsəŋ, tʂəŋ	jeng	tʂəŋ
(12) 綻	澄二(仄)	dzan	tʂan	tʂan	jan	tʂan

(11)「争」は『広韻』では側茎切「競也、引也」のほかに、去声「諍」(側迸切)において「諍諍也、止也、亦作争」としての2音が収められている。この字について『対音協字』ではjengという音の他にdzengという音としても収めているが、『広韻』に現れる2種類の音は声調を除いた声母、韻母は同一であるため、この二つの表記がそれぞれを表しているとは考えづらい。『対音協字』では他にあまり見られないが、音の揺れを表しているとも考えられる。

(12)「綻」は『対音協字』ではdzanと非反り舌音で表記されるが、『合併字学集韻』、『西儒

19) 例えば『dailiyou gurun -i suduri』(大遼国史, 順治3年, 1646刊)では、後の資料でjenと表記される「鎮」「真」をjenのほかにjinとも記している。

耳目資』ではどちらも反り舌音として収める。このような例は珍しい。知二莊組字が韻母を問わずにdz, tsと表記されるのは初期有圈点資料と共通する特徴である。

### 3. 2. 2. 徹二初母字

続けて徹母二等および初母字についても見てみたい。

表6 徹二初母字 (その1)

漢字	中古声母	対音協字	合併	西儒	清文鑑	現代北京音
(13) 策	初	ce	tʂ'ɛ, tʂ'ai	ts'ɛʔ	ce, tse	tsʰɿ
(14) 測	初	ce	tʂ'ɛ	ts'ɛʔ	tse	tsʰɿ
(15) 惻	初	ce	tʂ'ɛ	ts'ɛʔ	tse	tsʰɿ
(16) 拆	徹二	tse	tʂ'ɛ	ts'ɛʔ	tse, ce	tʂʰai, tsʰɿ

(13)「策」, (14)「測」, (15)「惻」, (16)「拆」は中古麦韻及び職韻, 陌韻入声字であり<sup>20)</sup>, (1)「側」, (2)「責」, (3)「沢」, (4)「扱」と平行した状況である。(13)「策」等の4字は現代北京語ではいずれも非反り舌音であるが、『対音協字』では(13)「策」, (14)「測」, (15)「惻」の3字は他の初母字と同じくcで表記され、(16)「拆」のみtsで表記される。『合併字学集韻』, 『西儒耳目資』では4字共に同一の声母である。『御製増訂清文鑑』では「策」, 「拆」ではce, tseの両方が、(14)「測」, (15)「惻」はいずれもtseのみが見られ、非反り舌音が多数である様子を窺うことができる。

表7 徹二初母字 (その2)

漢字	中古声母	対音協字	合併	西儒	清文鑑	現代北京音
(17) 差	初	tsy	tʂ'ɿ	tʃ'i, ts'ɿ	tsy	tsʰɿ
(18) 襯	初	tsen	tʂ'ən	tʃ'in, ts'en	cen	tsʰən
(19) 岑	崇 (平)	cen	tʂ'ən	tʃ'in, ts'en		tsʰən
(20) 纂	初	tsuwan	tʂ'uan	ts'uən		tsʰuan
(21) 攄	徹二	tseng	tʂ'əŋ	ts'əŋ	ceng	tsʰəŋ
(22) 攄	初 <sup>21)</sup>	dzeng, tseng	tʂəŋ		jeng	tʂəŋ
(23) 愴	初	tsang	tʂ'uaŋ	tʂ'uaŋ		tsʰuaŋ

(17)「差」は『対音協字』ではここに取り上げたtsyの他にcaiという音で載せる。それぞれ『広韻』の楚宜切「次也, 不齊等也」, 楚皆切「簡也」に対応する。現代北京語のtsʰa (陰平) に対応する初牙切「扱也」, tsʰa (去声) に対応する『集韻』初嫁切 (異也) は『対音協字』には見られない。tsyで表記される音は『合併字学集韻』では「參差不齊也」と字義が書き添えられ、「鴟」「痴」など他の昌徹三母字と同音として収められている。一方『西儒耳目資』では「鴟」「痴」などと同音として収める他に、清母字「雌」と同音としても載せている。『御製増訂清文鑑』ではtsyと表記される。

(18)「襯」は現代北京語では反り舌音で発音されるが、『対音協字』ではtsenと表記される。『合併字学集韻』ではtʂ'ənとして収められ、現代北京語と同様に昌母「称 (称心)」徹母「趁」などと同音である。『西儒耳目資』では「趁」と同音のtʃ'in, および非反り舌音のts'enの2音

20) これら四字のうち、(16)「拆」のみ『広韻』に見られず、『集韻』に依った。『集韻』には「拆」を「蛤」と同字として挙げている。「蛤」は『広韻』に丑格切として現れる。

21)「攄」は『広韻』には見られず、『集韻』に初耕切として収める。

が見られる。『御製増訂清文鑑』ではcenと表記され、『対音協字』と異なり、現代北京語と同様な音で記されている。

(19)「岑」は声調を除き、『合併字学集韻』、『西儒耳目資』ともに(18)「襯」同音として扱われている。しかしながら『対音協字』においては異なる。

(20)「纂」は『合併字学集韻』ではtʂ'uanという音であり、昌母字「釧」などと同音である。一方『西儒耳目資』では「纂」をts'uɔn, 「釧」をtʂ'uenと区別している。『語言自邇集』では「纂」についてch'uan, ts'uanの2音を載せる。

(21)「擗」は他の多くの初母字と同様に『合併字学集韻』ではtʂ'əŋと反り舌音として、『西儒耳目資』では非反り舌音として収める。この字についても(18)「襯」と同様に『対音協字』と『御製増訂清文鑑』は異なり、後者が現代北京語と同じ音となっている。

(22)「掙」は『広韻』には見られず、『集韻』に初耕切「博雅刺也」として収める。これは現代北京語のtʂəŋと対応する音ではない。現代北京語音に対応する音についての記載は『字彙』に側迸切「剗也」とあるのがそれであろう。『対音協字』ではdzeng, tsengの2音が見られ、一見すると前者は『字彙』の側迸切、後者は『集韻』の初耕切に対応するかのようである。実際に『四声通解』(1517)ではtʂuiŋという音に「掙挫」という説明を載せ、tʂuiŋという音に「刺也」という語釈を載せている。そのようなことから、『対音協字』では字義により異なる音を載せていると考えられる。

(23)「愴」は『広韻』初亮切であり、『韻鏡』では開口として扱われるが現代北京語ではこれら陽韻莊組字は江韻莊組字と合わせて合口で発音される。この変化については『四声通解』では『洪武正韻』から帰納された音を「正音」としてtʂaŋと開口で示しつつ、「俗音」としてtʂuaŋという合口の音も示している。『合併字学集韻』では「愴」はtʂ'uaŋと合口として収めており、『西儒耳目資』でも合口介音を持っている。このようなことから『対音協字』におけるtsangという表記は実際の音の反映ではなく、そのように表記される「倉」「滄」などの類推によるものであると考えられる。

### 3. 2. 3. 生母字

以下は生母字の例である。

表8 生母字 (その1)

漢字	中古声母	対音協字	合併	西儒	清文鑑	現代北京音
(24) 色	生	se	ʂɛ, ʂai	seʔ	ʂe, se	sy, ʂai
(25) 穡	生	ʂe	ʂɛ	seʔ	ʂe	sy
(26) 瑟	生	ʂe	ʂɛ, ʂɻ	seʔ	ʂe	sy
(27) 虱	生	se	ʂɛ, ʂɻ	seʔ	ʂi	ʂɻ
(28) 洩	生	se	ʂɛ	seʔ	se, ʂe	sy

(24)「色」, (25)「穡」は職韻入声字である。いずれも『広韻』で所力切であり、同音となることが想定されるが、『対音協字』ではそれぞれseとʂeという2音に分かれて記されている。『合併字学集韻』ではいずれもʂɛという音を持ち、『西儒耳目資』ではその反対に2字共に非反り舌音で表記される。『対音協字』においては2種類の音の層の存在を考えるのが適切であろう。

(26)「瑟」, (27)「虱」の2字は臻撰櫛韻字, (28)「洩」は咸撰緝韻字である。これらの字は(24)「色」, (25)「穡」などの職韻入声字と同音で示される資料が多いが、一方で『合併字

学集韻』や現代北京語にあるようなʂʅという音が現れるのもその特徴である。これに対応する音は『中原音韻』(1324)にも見られ、『中原音韻』支思韻では(28)「洪」および(26)「瑟」に対し「音史」という注釈を加えている。また、王文璧『中州音韻』では(27)「虱」について『中州音韻』支思韻の「入作平声」に収め、「叶詩」と記している。一方、職韻由来の(24)「色」(25)「穡」は『中原音韻』では皆来韻に分け二つの系統ははっきりと区別される。『対音協字』ではʂʅにあたる音は見られず、声母は2種類が併存している。『御製増訂清文鑑』では(27)「虱」のみʂiと表記され、現代北京語と共通する様相を呈している。

表9 生母字(その2)

漢字	中古声母	対音切音	合併	西儒	清文鑑	現代北京音
(29) 搜	生	seo	ʂəu, səu, sau	səu	seo	sou
(30) 瘦	生	seo	ʂəu	səu	seo	ʂou
(31) 腴	生	seo	ʂəu	səu		ʂou

(29)「搜」, (30)「瘦」, (31)「腴」はいずれも尤韻及び宥韻字であり、声調のみ異なる字である。そして(31)「腴」は(30)「瘦」の異体字である。『合併字学集韻』では(29)「搜」はʂəuとして「索也, 求也, 聚也」, səu(平声)として「求也」を載せ、同義でありながら二つの読音があったことを示している。他にもsauに「搜搜, 動貌」, səu(去声)に「闕人名」とも収めている。前者は『集韻』にある蘇遭切「搜搜, 動兒」と対応し、後者は同じく『集韻』にある蘇后切「闕人名」と対応する音である。一方(30)「瘦」, (31)「腴」の2字についてはʂəuのみを載せている。『西儒耳目資』では3文字いずれもsəuという音である。『対音協字』では『西儒耳目資』と同様の状況を表していると見ることができる。『御製増訂清文鑑』では「搜」「瘦」の2字のみ現れ、いずれもseoと表記されている。

表10 生母字(その3)

漢字	中古声母	対音協字	合併	西儒	清文鑑	現代北京音
(32) 洒	生	ʂa	ʂa, ʂai	ʂa, ʂai		sa
(33) 灑	生	suwai	ʂa, ʂai	ʂa, ʂai	ʂa, sa	sa

現在では(32)「洒」は(33)「灑」の簡体字という扱いであるが、『対音協字』ではそれぞれ別の音を持つ字として収めている。(32)「洒」は『広韻』では所売切「洒埽」また先礼切「上(洗)同」として収められる。それに対し、(33)「灑」は『広韻』では砂下切「灑水也」, 所蟹切「灑水」, 所寄切「灑埽, 説文汎也」, 所綺切「灑埽」である。「洒埽」「灑水」「灑埽」という共通する意味において5種類の音があると言することができる。これに対して『合併字学集韻』ではʂa(上声)に(33)「灑」, (32)「洒」の順に並べ「灑水也」と意味を加えている。これは『広韻』砂下切に対応する。また, ʂaiには「汎」<sup>22)</sup>の同字として(32)「洒」, (33)「灑」の順に収め、『広韻』所蟹切と対応を見せる。『西儒耳目資』でも同様に2字共にʂaおよびʂaiという2音で収めており、いずれもsではなくʂとして収めていることは、これまで見てきた他の字とは異なっている。『対音協字』に見える(32)「洒」ʂaという音は、『合併字学集韻』, 『西儒耳目資』のʂaと同様な音をあわらしているとみられる。一方、(33)「灑」のsuwaiという表記はこれまで見てきた資料からは説明がつかない。あるいは『合併字学集韻』や『西儒耳目資』のʂaiのような音を表したかったとも考えられる。『御製増訂清文鑑』では「灑」のみ現

22)「汎」は『広韻』所売切に「水兒, 説文灑也, 本又音信」とある。

れ, ša, saの2音で記される。

表11 生母字 (その4)

漢字	中古声母	対音協字	合併	西儒	清文鑑	現代北京音
(34) 駢	生	sin, siyan	ʂən	sin		ʂən
(35) 森	生	šen	ʂən	fʃn, sen		sən
(36) 所	生	šo	ʂuo	sɔ	šo, so	suo
(37) 生	生	seng	ʂəŋ	səŋ	šeng	ʂəŋ
(38) 參	生	seng	ʂən	sen	šen	ʂən
(39) 爽	生	suwang	ʂuaŋ	ʂuaŋ		ʂuaŋ

(34)「駢」は『対音協字』ではsinおよびsiyanと表記され、前者は真韻心母字である「新」などと同音として収められ、『西儒耳目資』と共通する。一方後者は他の資料には見られず、「先」などの類推による表記であると考えられる。

(35)「森」は『合併字学集韻』では審母字「申」などと共にʂənという音で収められており、『対音協字』もこれと同様である。『西儒耳目資』ではfʃn, senの2音を収め、(18)「襯」にtʃʃn, tsʻenの2音が併記されていることと平行している。

(36)「所」は『合併字学集韻』ではʂuoとして収める。一方『西儒耳目資』ではsoと記している。『御製増訂清文鑑』ではšo, soの2音が、また『語言自邇集』にもshuo, soの2音が現れていることから、音の揺れが続いていたことがわかる。

(37)「生」は『広韻』では所庚切であり、(37)「生」のほか「笙」「甥」などを同音字として収めている。『合併字学集韻』では「生」「甥」をʂəŋとして、『西儒耳目資』では「生」を「甥」を共にsəŋと収めている。どのような声母であったかということは異なるが、2字が同音であったという点においては両書は共通する。一方、『対音協字』では「甥」はšengと表記され、(37)「生」と「甥」は異なる音である。

(38)「參」は『広韻』には5音が載せられているが、いずれも深咸撰字であり、『対音協字』ではn韻尾となることが期待される。韻尾がngで記されているのはn韻尾とng韻尾の混用によるものであると見られる。声母に注目すると「參」は『対音協字』ではtsan, sengの2音が見られ、前者は倉舍切「參承, 參觀也」と対応し、後者は所今切「參星」と対応すると考えられる。この音について『合併字学集韻』ではʂənとして収めており、『西儒耳目資』ではsenという音で収めている。

(39)「爽」は『広韻』疎兩切であり、『合併字学集韻』ではʂuaŋ、『西儒耳目資』でもsuaŋではなく、ʂuaŋという音で収めている。「爽」とは声調のみ異なる「霜」(『広韻』色莊切)は『合併字学集韻』でも『西儒耳目資』でもやはり声調以外は同じ音である。一方、『対音協字』では「霜」はsuwangという音に収め、「爽」とは異なっている。現代北京語においてはsuaŋ(敢えてピンインで書くとすればsuang)という音節は存在しないが、現代北方方言の一部、例えば牟平、天水、武漢などでは「双」が[suaŋ]と発音されることから、『清書切音・対音』に見えるsuwangという音も決して非現実的な音というわけではなく、方言音としてこれら2音が併存していたということは充分考えられる。

ここまで『対音協字』における中古知二莊組字における表記に注目し、主に北京音に基づく『合併字学集韻』と南京音に基づく『西儒耳目資』との対照を通し分析を進めてきたが、字によるばらつきが大きく、一概にどちらよりも言えない様子が浮かび上がった。さらには時にそのどちら符合しない、初期有圈点資料に見られるそれらがおしなべて非反り舌音とする表記

との共通点もいくつかで見られた。

### 3.3. 有気・無気音

『対音協字』では複数の文字において有気音が想定される字が無気音を表す字で記されていたり、その反対に無気音が想定される字に対して有気音を表す字で記されていたりする。以下にはそれらについて見てみたい。

#### 3.3.1. pとb

『対音協字』に最も多く見られるのはpとbについてであり、10字見られる。それらを表にまとめると以下ようになる。

表12 pとb

漢字	対音協字	中古声母	現代北京音	漢字	対音協字	中古声母	現代北京音
(40) 勃	pu	並 (仄)	po	(45) 倍	pei	並 (仄) , 並 (平)	pei
(41) 渤	pu	並 (仄)	po	(46) 半	ban, pan	幫, 滂	pan
(42) 憊	pai	並 (仄)	pei, pai	(47) 扳	pan	幫, 滂	pan
(43) 扒	pa	幫	pa, p <sup>h</sup> a	(48) 嬪	bin	並 (平)	p <sup>h</sup> in
(44) 幡	po	幫	po	(49) 葩	ba	滂	p <sup>h</sup> a

(40)「勃」, (41)「渤」は中古音で同音であり、『合併字学集韻』ではいずれもpuとして収めている<sup>23)</sup>。一方『西儒耳目資』ではp<sup>h</sup>という音で収め、『対音協字』と同様である。これと対応するように現代北方方言のうち江淮官話、西南官話ではこれらの字が有気音で発音される。『対音協字』はそのような音に基づくものであろう。初期有圈点資料である『満文三国志』においても2字共にpuと表記される。

(42)「憊」は中古並母仄声字であり幫母と合流するのが規則的な対応である。『西儒耳目資』では幫母字「捭」と同音字として収められている。一方、『合併字学集韻』ではpaiとして「病也, 又尉也」として収める他にp<sup>h</sup>aiに「病也」という音も収めている。そのことから『対音協字』に見られるpaiという表記は単純な誤認というわけではないのかもしれない。

(43)「扒」は『広韻』には博抜切「破声」, 博怪切「拔也」, 方別切「擘也」の3音を載せ、いずれも幫母である。『合併字学集韻』ではpuaに「破声」, puaiに「拔也」, pieに「擘也」と『広韻』の3音に対応する音が見られるほかに, p<sup>h</sup>uaに「俗手扒」とある。『対音協字』にみられるpaという音は、この口語的な新しい音を示しているのであろう。

(44)「幡」は中古幫母字であり、また他の資料でもそれに対応する音で収められている。『対音協字』に見られるpoは並母平声である「鄙」「幡」などの類推によるものとも考えられるが、『満文三国志』ではこの字が1回現れ、そこではpuと表記されていることから、あるいは「幡」がp<sup>h</sup>であるという認識が広まっていた可能性も考えられる。

(45)「倍」は『広韻』に薄亥切「子本等也」のみ載せるが、『集韻』には蒲枚切「河神名, 一曰倍尾, 山名」とある。『合併字学集韻』には前者に対応する音としてpeiに「加也, 莊子道

23)『合併字学集韻』では(40)「勃」, (41)「渤」は共にpuという音で収めている。韻母がuであることについては韻母について分析する際に詳述し、ここでは声母にのみ注目する。

大倍情<sup>24)</sup>」を載せ、後者に対応する音にはp'eiに「何神名<sup>25)</sup>、一曰倍尾、山名」を載せる。『対音協字』に見られるpeiという音は『集韻』蒲枚切に基づく音ということも考えられるが、『広韻』薄亥切での用例がより一般的であると考えられることから、そうではなく、peiとして取められる「陪」「賠」の類推による可能性が考えられる。

(46)「半」は『対音協字』にはban, panの2音が取められる。前者は『広韻』博漫切<sup>26)</sup>(幫母)に「物中分也」とある音に対応する。後者については『集韻』普半切(滂母)に「大片也」とあるのに対応する。『合併字学集韻』にはそれぞれに対応する2音を載せている。

(47)「扳」は『広韻』では布還切(幫母)に「挽也」、また、普班切(滂母)に「上(攀)同」とある。『合併字学集韻』にはpuanという音で「挽也」、p'uanという音で「引也」とある。『対音協字』におけるpanという音は、滂母の音を反映したものと考えられる。

(48)「嬪」は中古並母平声字であり、他の資料でもそれに対応する音で取められている。『対音協字』でbと表記されるのは個別的な状況であると考えられる。構成要素である「巴」「芭」からの類推によるものであろう。『対音協字』ではbinという音で幫母字「賓」「浜(濱)」などを収めていることから、これらによる類推であると考えられる。

(49)「葩」は中古滂母字であり、(48)「嬪」と同様に『対音協字』でbaと表記されるのは個別的な状況であると考えられる。構成要素である「巴」「芭」からの類推によるものであろう。

### 3.3.2. tとd

tとdについては5字見られる。それらを表にまとめると以下のようなになる。

表13 tとd

漢字	対音協字	中古声母	現代北京音	漢字	対音協字	中古声母	現代北京音
(50) 踏	da, doo	透	tʰa	(53) 叢	tu	定(仄)	tau
(51) 隄	ti	端, 定(平)	ti	(54) 淡	tan	定(仄)	tan
(52) 滄	ti	端	ti				

(50)「踏」は中古合韻透母字である。この字は『集韻』では合韻定母字としても取められており、『合併字学集韻』ではta(陽平), ta(去声), t'a, tʂaの四音を載せる。現代北方方言では冀魯官話でtʂaという音が見られる他は透母由来字として発音されるが、現代吳方言では濁音声母として発音される。歴史的資料に目を転じると『四声通解』では濁音字(仄声)として取めており、次清音字は見られない。同様に『西儒耳目資』では「踏」字は端母字「達」などと同音としてのみ取められており、これらはいずれも『対音協字』と共通する。現代とは違った音が広く通用していたことを窺わせる。daという音もそれに対応して記されたのであろう。また、もう一方dooという音はこれらの資料からは説明がつかず、号韻定母字である「蹈」による音であると考えられる。

(51)「隄」は『広韻』では端母と定母(平声)の2音を取める。前者は「防也」とあり、直後の「堤」と同じ意味であると説明している。そして後者は「隄封、漢書作提」とある。『合

24) ここに見える「道大倍情」は「通天倍情」(『莊子』養生主)の誤りと考えられる。

25) 「何神名」は「河神名」の誤りと考えられる。

26) 『広韻』張氏沢存堂刊本では「博漫切」とするが、これは「博漫切」の誤り。「漫」は換韻、「慢」は諫韻である。

併字学集韻』ではtiに「防也，岸也」，また，tiに「隄防也」と載せている。これを見ると『対音協字』に見えるtiという音は後者にあたり実際の発音に基づいた表記だと考えることもできるが、『西儒耳目資』に限らず『五音集韻』、『四声通解』でも定母に対応する音を収めていないことや，それらの書物に見られる端母に対応する音が見られないことから，「提」などの字の類推によるためであることも考えられる。

(52)「滄」は中古端母字である。『合併字学集韻』にはtiに「埤蒼云，滄待，漉也」とあり，これは『広韻』を引いたものである。またtiは「啼」の異体字としても収めている。『四声通解』、『西儒耳目資』にはこの字は見られない。このようなことから常用字ではなく，『対音協字』には「啼」が見られないことから，tiという音は「啼」の異体字として収めていることが考えられる。

(53)「纛」は中古定母（仄声）字である。『広韻』では沃韻と号韻の2音を収めている。現代北京語のtauという発音は後者の規則的な対応であるといえる。『西儒耳目資』、『合併字学集韻』いずれも『広韻』の2音にそれぞれに対応する音が見られる。『対音協字』でduではなくtuという音で収められている理由については，単なる誤認の可能性が考えられるが判断は難しい。『対音協字』では同音であったと考えられる「読」はduである。「毒」は見られない。

(54)「淡」は『広韻』には，徒甘切（定母平声）「水兒」，徒敢切（定母仄声）「滔淡，水瀉兒，又薄味也」，以冉切（以母）「澹淡，水兒」，徒濫切（定母仄声）「水味」の4音を載せる。『対音協字』に見られるtanという音は一つ目の定母平声の音に対応するが，この音を徒敢切を差し置いて収録する理由を見つけないのは難しく，あるいはtanという音である「談」などの類推であるとも考えられる。

### 3.3.3. kとg

表14 kとg（その1）

漢字	対音協字	中古声母	合併	西儒	現代北京音
(55) 昆	kun	見	kuən, k'uən, huən	kuen, k'uen, huen	k <sup>h</sup> uən
(56) 崑	kun	見	k'uən	kuen, k'uen	k <sup>h</sup> uən
(57) 琨	kun	見	kuən, k'uən	kuen, k'uen	k <sup>h</sup> uən
(58) 鯤	gun	見	kuən, huən	kuen, k'uen	k <sup>h</sup> uən

(55)「昆」，(56)「崑」，(57)「琨」，(58)「鯤」は『広韻』に古渾切として収められているが，現代北京語ではどれもk<sup>h</sup>uənと有気音で発音される。『中原音韻』、『四声通解』には溪母に相当する音は見られない。『西儒耳目資』では4字共にkuen, k'uenの2音を載せている。一方『合併字学集韻』においてはそれと異なり，字ごとの音のばらつきが大きい。それらのうち，『対音協字』においてkunと表記される各字にk'uənという音が見られることを指摘しておきたい。『御製増訂清文鑑』には(55)「昆」，(56)「崑」，(58)「鯤」の3字が現れ，いずれもkunと表記される。

表15 kとg（その2）

漢字	対音協字	中古声母	現代北京音	漢字	対音協字	中古声母	現代北京音
(59) 鯨	king	群（平）	tciŋ	(62) 蝠	kiowei	群（仄）	tɕey
(60) 瓊	gioi	群（平）	tɕ <sup>h</sup> y	(63) 覷	kiyan	見，幫	tciɛn, piɛn
(61) 響	gu	溪	k <sup>h</sup> u	(64) 嚙	k'a		ka

(59)「鯨」は中古群母平声であり、現代北京語でtcinと発音されるのが例外的であると言える。この字については『合併字学集韻』、『西儒耳目資』も『対音協字』と同様である。現代北京語での発音は近年になり見られるようになったものであり、『語言自邇集』ではchingとch'ingの2音が見られる。

(60)「瓊」も中古群母平声であり、こちらは現代北京語音が規則的な対応である。『合併字学集韻』、『西儒耳目資』でも同様である。この字が『対音協字』でgioiと表記されるのは、「據」などの類推によるものであると考えられる。

(61)「響」は『広韻』には苦沃切(溪母)に「帝響, 高辛氏也」とあり、他の資料でそれに対応した音で取められる。『広韻』には沃韻見母として「告」を載せており、また、後の資料でもこれに対応する音が見られるが、この音が広く通用していたとは限らないことから、『対音協字』がこの影響を受けていたとも考えづらい。『対音協字』においてguと表記される理由を断定することは難しい。

(62)「傭」は中古群母仄声である。『広韻』には衢物切(群母仄声)、魚勿切(疑母)の2音を載せる。他の資料では主に群母仄声に対応する音を載せている。『対音協字』に見られる音は、溪母字である「屈」などの類推であると考えられる。

(63)「覲」は『広韻』には古閑切、古莧切(共に見母)及び方免切(幫母)の3音を載せる。『合併字学集韻』には『広韻』に対応するkian, pianという音の他に、hian, ianの音を載せるが、『対音協字』のkivanに対応する音は見られない。『西儒耳目資』も同様である。「見」を構成要素に持つ「覲」、「況」、「覘」なども溪母字としての音があるが、これらの影響を受けたとは考えづらい。

(64)「噶」は『広韻』、『集韻』には見られない字である。『字彙補』に古渴切とあるが、主に音訳に使われる字である。例えばヌルハチに仕え、エルデニと共に無圈点満洲字を作ったガガイは「噶蓋」、モンゴル語由来の「ジュンガル」は「準噶爾」と書かれ、満洲字のg'aあるいはgaに対応して用いられる。『対音協字』ではk'aの音を持つのは(64)「噶」1文字のみであること、また、g'aの音を持つ字が取められていないことから、単純にg'をあらわす点を書き漏らしたことが考えられる。

### 3.3.4. cとj

表16 cとj

漢字	対音協字	中古声母	現代北京音	漢字	対音協字	中古声母	現代北京音
(65) 適	jio	精, 從 (平)	tch'iou	(70) 輒	ce	澄 (仄)	tʂɤ
(66) 揪	cio	精	tciou	(71) 酬	jeo	常 (平)	tʂ <sup>h</sup> ou
(67) 截	ciyei	從 (仄)	tcie	(72) 悵	jang	徹	tʂ <sup>h</sup> aŋ
(68) 竣	jiyūn	清	tɕyn	(73) 潮	joo	澄 (平)	tʂ <sup>h</sup> au
(69) 棧	can	崇 (仄)	tʂan				

(65)「適」は『広韻』では即由切(精母)に「尽也」とあり、自秋切(從母平声)にも同様に「尽也」とある。音の面から見ると『対音協字』に見られるjioという音は前者に対応し、現代北京語は後者に対応する。『合併字学集韻』ではこの2音を含む複数の音を取めているが、『四声通解』『西儒耳目資』では清母に対応する音のみを取めている。このことから『対音協字』に見られる音が中古由来の音であると断定することも難しい。同じく『広韻』自秋切である「箇」の類推とも考えられる。

(66)「揪」は『広韻』には見られず、「擎」を即由切(精母)として収める。そして『字彙』では「揪」を(字彙)即尤切,「擎」を(字彙)即由切として収める。この二つの反切には異なる字を用いているが、同音を示している<sup>27)</sup>。『正字通』には「擎, 肢, 揪並同」とある。いずれにせよ『対音協字』に見られる*cio*に対応する清母の音は見られない。『合併字学集韻』では「揪」と「擎」を異なる字として収め、前者は*tsiəu*と、後者は*tsiəu*という音のほか*ts'əiəu*にも収めている。また、『西儒耳目資』では「擎」のみ*tsiəu*という音で載せている。現代北京語での状況も考慮に入ると、『対音協字』に見える*cio*という音は単純に「秋」の類推によるものとも考えられる。

(67)「截」は中古従母仄声であり、他の資料でもそれに対応する声母で収められている。『対音協字』に見られる音は類推によるものとは考えづらい。現代北方方言に目を向けると、いくつかの地点で*tɕʰ*と発音される<sup>28)</sup>。『対音協字』での音もこのような方言音であったとも考えられる。

(68)「竣」は中古清母字でありながら『対音協字』では*jiyün*と表記される。現代北京語でもやはり*tɕyn*と無気音で発音される。『合併字学集韻』には*ts'yən*, *tsuən*, *ts'uən*, *tɕuən*の四音を載せているが、中古音及び『対音協字』に対応する音は見られない。一方、『西儒耳目資』では*ts'iun*という音のみが見え、これは中古音と対応している。『対音協字』に見られる*jiyün*という音は、「俊」などによる類推、あるいは現代音に通じる変化を捉えた初期のものである可能性も考えられる。

(69)「棧」は『広韻』に士限切「閣也, 亦姓, 魏有任城棧潜」, 士免切「棚也」, 士諫切「木棧道」の3音を載せ、いずれも崇母仄声である。『集韻』には他に鋤臻切「衆盛兒」とあり、この音は崇母平声であるが、臻韻であるため『対音協字』では*cen*あるいは*tsen*と表記されることが想定される。『合併字学集韻』ではこの字を*tɕan*および*tsian*という音で収めており、『対音協字』の*can*に対応する音は見られない。『西儒耳目資』でも同様に2種類の声母の音が見られる<sup>29)</sup>。他に現代北方方言を見てもこの字は無気音で発音されるといったことから、実際の音に基づいていたのではなく、誤認による可能性が考えられる。

(70)「轍」は『広韻』では直列切(澄母仄声)に見られる。『合併字学集韻』ではこれに対応する*tɕɛ*に「車轍也, 又迹也」とあり、ほかに*tɕ'ɛ*にも「車跡」とある。また、『西儒耳目資』では*tɕ'ɛ*という音のみを載せている。このようなことから、『対音協字』に見られる*ce*という表記は「徹」の類推によるものであるとも限らず、当時の実際の発音に基づいたのものであるとも考えられる。

(71)「酬」, (72)「悵」, (73)「潮」はそれぞれ中古常母平声, 中古徹母, 中古澄母平声字であり『対音協字』では*ceo*, *cang*, *coo*と表記されることが想定される。これらの字はいずれも他の資料では『対音協字』に見られる音に対応する記述は見られないことから、類推などによるためとみられる。いずれも*c*と書くべき所を*j*と書いてしまった例である。

27)「揪」には反切に続けて「酒平声」とあり、「擎」には「音啾」とある。「啾」を見れば「即由切」に続けて、「酒平声」とある。この二つの反切はいずれも「酒平声」と説明されている。

28)『汉语官话方言研究』によれば天水(中原官话隴中片)[*tɕʰie*]、运城(同汾河片)[*tɕʰie*]、泰州(江淮官话泰如片)[*tɕʰi?*]、嵐県(晋語呂梁片)[*tɕʰie?*/*tcie?*] (前者が優勢)、忻州(晋語五台片)[*tɕʰie?*/*tcie?*] (前者が優勢)の各地点である。この各地点のうち运城、泰州、嵐県、忻州では多くの中古入声従母字が有気音で発音され、天水ではいくつかの中古入声従母字が有気音で発音される。

29)二書に見られる精母に対応する音は『広韻』及び『集韻』には見られない。『合併字学集韻』では(合併)敢韻精母であるこの音について「小橋」と説明している。これについては『古今韻会举要』に見られる阻限切「小橋」との関連を指摘できる。ただ反切上字の「阻」は『古今韻会举要』では「次商清音」に分類される。この「次商清音」は中古知莊母に当たり、中古精母字に当たる音ではない。

## 3.3.5. tsとdz

表17 tsとdz

漢字	対音協字	中古声母	現代北京音	漢字	対音協字	中古声母	現代北京音
(74) 族	tsu	從 (仄)	tsu	(75) 糟	tsoo	精	tsau

(74)「族」は『広韻』には昨木切とあり、従母入声である。他の資料でもこれに対応して精母字と同じ声母として収められる。『対音協字』ではこの字の後には清母字の「簇」が挙げられている。常用の度合いを考慮すると「簇」の音が「族」に影響を及ぼすことは考えづらく、この字が『対音協字』でtsと表記されるのは(67)「截」で言及した様に一部の現代北方方言に見られるような方言的要素と関連する可能性も考えられる。

(75)「糟」は中古精母字であり、他の資料でもこれに対応した音で収める。清母字である「曹」などの類推によるものであろう。

## 3.4. 破裂音と破擦音

ここからは破裂音を表す字で表記されることが想定されながら破擦音を表す字で表される、あるいはその反対の例について見てみたい。

表18 破裂音と破擦音 (その1)

漢字	対音協字	中古声母	現代北京音	漢字	対音協字	中古声母	現代北京音
(76) 嗣	tsy	邪 (仄)	s <sub>l</sub>	(79) 純	sun	常 (平)	t <sup>h</sup> suən
(77) 寺	tsy	邪 (仄)	s <sub>l</sub>	(80) 淳	sun	常 (平)	t <sup>h</sup> suən
(78) 賜	sy	心	ts <sup>h</sup> <sub>l</sub>				

(76)「嗣」、(77)「寺」はいずれも中古邪母字ながら『対音協字』ではtsyと表記される。『合併字学集韻』、『西儒耳目資』ではいずれも心母字に対応する声母のみに収めている。一方、邪母平声である「詞」は両書共にts', sに相当する2種類の声母に見られる。時代の下った『御製増訂清文鑑』では「寺」をsy, 「嗣」をtsyと記しており、『対音協字』に見られるtsyという音は単純に取り違えによるものとも言えないようである。

(78)「賜」は『対音協字』ではsyと表記され、他の心母字と同様であるが、現代北京語音でts<sup>h</sup><sub>l</sub>と発音されるため取り上げた。この字は『合併字学集韻』『西儒耳目資』では共に他の心母字と同様の声母であり、『対音協字』と対応する。『御製増訂清文鑑』にはtsy, syの2音が現れ、音の揺れている様子がわかる。

(79)「純」、(80)「淳」はいずれも中古音で同音である。中古常母字は現代北京語では平声字はt<sup>h</sup>sとsへと分かれ、仄声は一律にsと発音される。例えば「順」は(79)「純」、(80)「淳」と声調のみ異なる常母仄声字であるが、suənと発音される。『合併字学集韻』では、(79)「純」、(80)「淳」の2字を共にsuənとt<sup>h</sup>suənの両方に収めている。『西儒耳目資』では平声字としてはsunという音のみ見られる。このようなことから『対音協字』に見られるsunは当時の実際の音に基づいたものであると言えよう。

(81)「枢」と(82)「姝」は中古音で同音であり、いずれも昌母字であるが、現代北京語ではどちらもsuと発音される。この2字については以下に各資料における声母を見てみたい。

表19 「枢」 「殊」

漢字	中古声母	対音協字	中原音韻	四声通解	合併	西儒
(81) 枢	昌母	šu	tʃiu	tʃiu, 今俗音或ʃiu	tʃ'u, ʃu	tʃ'u
(82) 殊	昌母	ju	tʃiu	tʃiu	tʃ'u, tʃu	tʃ'u

『中原音韻』では(81)「枢」は「樗」「攄」と同音であり、tʃと再構され、中古書母字「書」「輸」などとは区別される。一方(82)「殊」は「諸」「朱」などと同音であり、tʃと再構される。『四声通解』では(81)「枢」について正音としてtʃiuと示しつつ「今俗音或ʃiu」と記し、『対音協字』や現代北京語に通じる音を記している。それに対し(82)「殊」についてはtʃiuのみである。『合併字学集韻』ではこの字についてtʃuとあることから、『対音協字』に見られるjuという音が単純に「朱」などの類推によるものであることもできない。『西儒耳目資』では2字ともにtʃ'uであり、他の昌母字と同様の声母である。

表20 破裂音と破擦音 (その2)

漢字	対音協字	中古声母	現代北京音	漢字	対音協字	中古声母	現代北京音
(83) 峻	jiyün	心	tcyn	(87) 疾	si	從(仄)	tei
(84) 苦	jan	書	ʃan	(88) 諂	siyoo	從(仄)	tc'hiu
(85) 隼	jun	心	sun	(89) 庠	ciyang	邪(平)	ciaŋ
(86) 席	si, ji	邪(仄)	ci	(90) 灼	šo	章	tʃuo

(83)「峻」は中古心母字でありながら『対音協字』ではjiyünと表記され、現代北京語ではtcynと発音される。『合併字学集韻』ではsyənのほかにtsyənにも収めておりこれに合致する。『西儒耳目資』ではsiunのみを載せる。

(84)「苦」は『広韻』に失廉、舒贍切の2音が見え、いずれも書母字である。また、『集韻』には他兼、詩廉、処占切を載せそれぞれ透、書、昌母であり、『対音協字』に見られる声母jとは対応しない。他の資料にも見られない音であることから、『対音協字』に見られる音は「占」などによる類推によるものであると考えられる。

(85)「隼」は中古心母字であり、声母をjで表記するのは例外的である。他の資料にこれに相当する音は見られず、junという綴りには他に「準」「准」などが収められていることから、これらによる類推であると考えられる。

(86)「席」は中古邪母字であり、これに対応するsiという音として収める他に、jiという音も見られる。後者に対応する音は他の資料には見られない。あるいはjiと表記されることが想定される「厝」(『広韻』秦昔切)の書き間違いとも考えられるが、この字は非常用字であることもあり断定は難しい。

(87)「疾」は中古從母仄声字であり、jiと表記されることが想定される。中古音では「嫉」と同音であり、この字は『対音協字』ではjiという音として収めている。この字が『対音協字』でsiと表記されるのは誤認による可能性が高い。

(88)「諂」は『広韻』才笑切であり、從母仄声字であることから精母と合流するのが規則的な対応である。『対音協字』におけるsiyoo、現代北京語におけるtc'hiuはいずれも例外的であると言える。『中原音韻』ではこの字は中古清母字である「佻」「峭」と同音であり、中古精母「醮」、從母仄声「瞧」とは区別されていることから、現代北京語と同じ状況である。『合併字学集韻』ではtsiau及びsiauの音が見える。『対音協字』に見られるsiyooという表記は「消」「宵」などによる類推とも考えられるが、実際の発音に基づいたのものであるとも考えられる。

(89)「庠」は『広韻』似羊切、中古邪母平声字であり、siyangと表記されることが想定される。『合併字学集韻』では(合併)心母であるが、『西儒耳目資』では「詳」「祥」「翔」などの中古同音字と共にts'ian, sianの2音に収めている。これらの字は現代北方方言では江淮官話及び西南官話でts<sup>h</sup>あるいはtɕ<sup>h</sup>という破擦音声母を持つ。『対音協字』では「詳」「祥」「翔」はsiyangと収めており、2種類の音が現れるのはそれぞれ異なる方言の音に基づいたためと考えられる。

(90)「灼」は中古章母字であり、『合併字学集韻』ではtʂoとして収められるが、『西儒耳目資』ではʂoという音に収め、『対音協字』と一致する。『御製増訂清文鑑』では、šoとjoの2音が見られる。

表21 破裂音と破擦音 (その3)

漢字	対音協字	中古声母	現代北京音	漢字	対音協字	中古声母	現代北京音
(91) 焜	gun	匣, 見	k <sup>h</sup> uən	(94) 檻	kiyan	匣	tɕien, k <sup>h</sup> an
(92) 皜	g'ao	匣	xau	(95) 矚	kiyan	匣	ɕien, tɕien
(93) 鎬	g'ao	匣	xau	(96) 渴	k'o, ho	溪, 群 (仄)	k <sup>h</sup> ɤ

(91)「焜」は『広韻』には胡本切(匣母), 『集韻』には公渾切(見母)として収められている。『合併字学集韻』ではxun, kunに収め、『広韻』, 『集韻』に見られる2音に対応する。一方『西儒耳目資』に見られるのはxuənのみである。

(92)「皜」は『集韻』に下老切として収められており, (93)「鎬」は『広韻』に胡老切として収められる。いずれも匣母字であり, 現代北京語に見られるxauという発音が規則的な音である。『合併字学集韻』では(92)「皜」はxauおよびkauに見られ, 『西儒耳目資』ではkaoという音のみが見られる。(93)「鎬」は『合併字学集韻』ではxauのみに見られ, やはり『西儒耳目資』でもxaoのみと同様の音を表している。(92)「皜」に対するg'aoという音は, 『合併字学集韻』及び『西儒耳目資』に見られる音を反映したものとも考えられるが, (93)「鎬」に対するg'aoという音は, 「高」などの類推によるものであろう。

(94)「檻」は中古匣母字でありながら, 『対音協字』ではkiyanと書かれ, 現代北京語ではtɕienあるいはk<sup>h</sup>anと発音される。『合併字学集韻』及び『西儒耳目資』には『対音協字』に対応する音は見られない。giyanであれば, 「監」などの類推による音と考えられるが, そうではない。『御製増訂清文鑑』でもこの字をkiyanと記していることから, 単純な誤認によるものではなく, あるいは口語に存在した音であったのかもしれない。

(95)「矚」は『広韻』では戸閏切(匣母)として現れる。『合併字学集韻』にはhianとkianの2音が見られる。『西儒耳目資』でも同じ二つの声母に対応する音が載せられている。『対音協字』にあるkiyanに対応する音は見当たらず, 由来の特定は難しい。

(96)「渴」は『広韻』苦葛切(溪母), 渠列切(群母仄声)に見られ, 前者が『対音協字』のk'oという音に対応する。柳宗元の「袁家渴記」には, 「楚越之間方言, 謂水之反流者为渴。音若衣褐之褐」とある。「褐」は『広韻』古葛切(匣母)であり, 『対音協字』に見られるhoという音に対応する。

### 3.5. 声母の添加

ここでは『対音協字』において零声母として表記されることが想定されながら, 他の声母を伴い現れる字について分析を加える。

表22 声母の添加

漢字	対音協字	中古声母	現代北京音	漢字	対音協字	中古声母	現代北京音
(97) 獻	hiyan	疑	iɛn	(100) 彦	niyan	疑	iɛn
(98) 炎	hiyan	于	ien	(101) 垣	hūwan	于	yan
(99) 燄	hiyan	以	ien	(102) 昂	hang, ang	疑	aŋ

(97)「獻」、(98)「炎」、(99)「燄」は規則的にはいずれもyanと表記されることが想定されるが実際にはhiyanという音で収められている。「獻」は曉母字「猷」による類推とも考えられるが、他の2字については別の資料や方言音にも対応する音が見られず、由来の特定は難しい。『対音協字』にはこれらと同音であったと考えられる、他の山威撰二三四等開口疑影于以母字があわせて28字現れるが、この3字及びniyanと表記される(100)「彦」を除いてすべてyanと表記される。(100)「彦」は中古疑母字であり、『西儒耳目資』では(100)「彦」等をiɛn, niɛnの2音で収める。また、中古疑母字をnあるいはŋで発音する現代北方方言も見られる。おそらくそのような方言音に基づいたものであろう。『対音協字』では「嚴」「言」など他の疑母字はyanという音で収めていることから、(100)「彦」は『対音協字』においては個別的な音であるということが出来る。

(101)「垣」は中古于母字であり、中古同音である「園」「袁」などはyuwanと表記される。『合併字学集韻』にはyanという音のほか、xuanに「桓」などと同音字として収める。また、『西儒耳目資』にもxuɛnという音が見られることから、このような音に基づいた表記であると考えられる。

(102)「昂」は中古疑母字であり、『対音協字』ではこれに対応するangという表記の他に、hangという音でも収めている。現代北方方言ではこの字を零声母、ŋ, n声母のほか、v声母で発音する地点もいくつか見られる。他の疑母字は(97)「獻」を除いてhとして現れず、方言音との関連は判断しづらい。

### 3.5. 声母の脱落

上で見たのとは反対に、声母を伴った音が想定されながら、零声母として現れる字も見られる。続けてそれらについて見てみたい。

表23 声母の脱落

漢字	対音協字	中古声母	現代北京音	漢字	対音協字	中古声母	現代北京音
(103) 懸	yuwan	匣	cyan	(108) 咸	hiyan.yan	匣	ciɛn
(104) 鉉	yuwan	匣	cyan	(109) 洸	wan	匣	xuan
(105) 眩	yuwan	匣	cyan	(110) 肥	fei, wei	幫	fei
(106) 暄	yuwan	曉	cyan	(111) 呆	ai	疑	tai, ai
(107) 萱	yuwan	曉	cyan	(112) 副	wa	見	kua

(103)「懸」、(104)「鉉」、(105)「眩」、(106)「暄」、(107)「萱」は匣母あるいは曉母字でありいずれもhiowanという表記が想定される。『対音協字』には「玄」という字が見られず、また、hiowanという音もないことから、あるいは康熙帝の諱である「玄燁」を避けたためとも考えられるが<sup>30)</sup>、一方で「燁」については歛筆もなくyeiという音で収めている。

30) 岸田(1994:81)によると、内閣文庫所蔵『清書千字文』においても「玄」と書くべき所を「元」と書きyuwanと表記しているという。これに対し岸田氏は康熙帝の諱を避けるために行ったと推測している。その

(108)「咸」は中古匣母字であり、hiyanという音がそれに対応する。『対音協字』には他にもyanという音を取めている。他の資料にこれに相当する音は見られず、この音の由来の特定は難しい。

(109)「流」も中古匣母字である。『合併字学集韻』ではxuan, kuanの2音が見られる。いずれも『対音協字』に見られるwanと対応する音ではなく、この字がwanと表記されるのは「完」による類推によるものであると考えられる。

(110)「肥」は中古並母であり、feiがそれに対応する。weiに対応する音は他の資料に見られず、由来は不明である。

(111)「呆」は『広韻』には見られないが、『集韻』では「保」の異体字として補抱切に収める。『正字通』に「今俗以呆為癡獸字」とあり、それとは別に「獸」の俗字として「呆」を用いていたことがわかる。「獸」は『広韻』五来切に「獸癡，象犬小時未有分別」とあり、この反切は『対音協字』のaiという音に対応する。『合併字学集韻』では「獸」はaiに対応するaiという音のほか、nai, niε, puauという音が見られる<sup>31)</sup>。このaiという音は近年では「呆板」という語を読むときのみ用いられている。「獸」は『対音協字』に現れない。

(112)「副」は中古見母字であり、guwaという音で表されることが想定される。中古で同音である「寡」はguwaである。『合併字学集韻』では「寡」と同音のkuaのほか、「別」の異体字としてpieという音で収めている。他の資料にも『対音協字』に見られるwaに対応する音は見られない。

### 3.6. n, lの混淆

現代中国語方言ではいくつかの地域で中古来母字と中古泥娘母字が合流し、音韻的対立が無い。北方方言においてもそのような地域は少なからず見られるが、『対音協字』ではその区別は明瞭である。ただ中古泥母字である「餒」のみleiと表記されるのが例外である。

### 3.7. 日母化

現代北京語において、中古日母字以外の字が、日母字と合流している字が見られる。ここではそれらの字について見てみたい。

表24 日母化

漢字	対音協字	中古声母	現代北京音	漢字	対音協字	中古声母	現代北京音
(113) 瑞	šui	常	zuəi	(116) 榮	žung	于	zuŋ
(114) 阮	žuwan	疑	zuən	(117) 容	žung	以	zuŋ
(115) 沅	žuwan	疑	yan				

(113)「瑞」は中古常母字であり、『広韻』では「睡」と同音字である。『対音協字』でもやはり同様であるが、やや時代の下った雍正年間の満漢合璧『満文三國志』、康熙年間の『満文金瓶梅』ではžuiという現代北京語に通じる音が見られるようになる。

(114)「阮」、(115)「沅」は中古疑母字ながら『対音協字』ではいずれもžuwanと表記され

他の資料における避諱の方法としては例えば『円音正考』(1743)では「玄」をhiowanとすべき所をsiowanとし、「此團音字敬避，俱用尖音」と説明している。尖団の区別がはっきりとしている『御製増訂清文鑑』でも、「玄」についてはhiowanという表記がまったく見られないわけではないものの、多く同様にsiowanと記している。

31) なお、daiに対応するtaiには「獸」の異体字として「𪛗」という字が見られる。

る。現代北京語では (114)「阮」のみzuanと発音され、(115)「沅」はyanと発音される。『合併字学集韻』では (114)「阮」についてはzuan, yanの2音を収め、(115)「沅」はyanのみ収めている。

(116)「榮」、(117)「容」はそれぞれ中古子母及び以母字であり、いずれも零声母となることが想定されるが、これら陽平声字は日母由来字のように発音される。この様子は『合併字学集韻』にも見られ、『合併字学集韻』では (116)「榮」、(117)「容」の2字はともにzuəŋとyəŋの2音が見られる。『対音協字』にはこれ以外に現代北京語でzuŋと発音される非日母由来字は見られない。

### 3. 8. その他

以下にはこれまで取り上げてない、中古音声母あるいは現代北京語音との対応が見られない字を見てみたい。

表25 その他

漢字	対音協字	中古声母	現代北京音	漢字	対音協字	中古声母	現代北京音
(118) 再	jai	精	tsai	(125) 耍	suwa		ʃua
(119) 餉	hiyang	書	ciaŋ	(126) 匙	tsy	常	tʃʰ, ʃ
(120) 倏	hioi	書	ʃu	(127) 執	jy, dze	章	tʃ
(121) 沮	jioi, dzu, ju	精, 清, 從, 莊	tʃy	(128) 什	ʃi, si	常	ʃ
(122) 紡	bang, fang	滂	faŋ	(129) 讓	ʒang, ʃang	日	zaŋ
(123) 沓	ti	書, 端	tʃʰ	(130) 勤	siyang	日	zaŋ
(124) 覩	miyan	透	tʃien	(131) 裡	ʃeng	徹	tʃʰəŋ

(118)「再」は中古精母字であり、dzaiと表記されることが想定される。同音であったと考えられる中古從母仄声字「在」はdzaiと表記される。『対音協字』において(118)「再」がjaiと表記されるのは満洲語において「再び」「さらに」の意味を持つ語であるjaiによる影響とも考えられる。

(119)「餉」は中古書母字であり、『対音協字』に見られるhiyang, 現代北京語におけるciaŋはどちらも規則的な対応ではない。『合併字学集韻』では中古音に対応する上声のʃaŋという音のほかに、それと声調のみ異なる音を載せる。『西儒耳目資』では上声と去声のʃaŋが見られる。このようなことから、『対音協字』に見られるhiyangはそのように表記される「向」などの類推によると思われる。『御製増訂清文鑑』においても(119)「餉」はhiyangと記されていることから、あるいは現代につながる変化を捉えた早期の資料であるとも考えられる。

(120)「倏」は『広韻』式竹切に「倏忽、犬走疾也」とある。また、『集韻』では同音ながら「倏」に「説文走也」とあり、「倏」に「光動兒」とある。現代北京語では「倏」を「倏」と書き、ʃuという音で発音する。これは式竹切に対応する規則的な音である。『合併字学集韻』ではʃuに「倏」を収め「倏忽、犬走疾貌」と記している。一方(120)「倏」は「倏」とともに同じくʃuという音で収めているものの「光動貌」と記し区別されている。(120)「倏」は他にxiuにも「倏忽」とあり、この音は『対音協字』のhioiに対応すると考えられる。ただ、この音の由来は不明である。

(121)「沮」は『広韻』七余(清母)、子魚(精母)、側魚(莊母)、慈呂(從母)、将預(精母)の5音が見られる。また、『集韻』には壯所切(莊母)の音も見られる。現代北京語ではtʃyと発音されるが、これは子魚切の音に対応する。『対音協字』に見られるdzu, juについては莊母の音に対応したものであると考えられる。『合併字学集韻』にはtʃuに「止也、百沮陽景

名、在上谷」とあり、これは『集韻』壯所切「止也、一曰沮陽県名、在上谷」に由来すると考えられる。莊母字が『対音協字』においてjとdzの2種類の音で表されるのは3. 2. 1で見えてきたとおりである。

(122)「紡」は『広韻』に妃両切として収められており、『対音協字』のfangという音に対応する。bangについては『説文通訓定声』に「紡、俗字作綁」とあり、「綁」は『広韻』、『集韻』には見られず、『字彙』に「音榜」とある。類推による音であるとも考えられず、この音を記したものであろう。

(123)「啻」は『広韻』施智切に「不啻」、また、『集韻』丁計切に「高声」とあるが、いずれも『対音協字』にあるtiとは対応しない。『合併字学集韻』には『広韻』に対応するsɿに「不啻」と、『集韻』に対応するtiに「高声」とあるほか、tiにも「不啻」と、tsɿに「不止也」とあり、前者が『対音協字』に、後者が現代北京語音に対応すると考えられる。

(124)「覩」は中古透母字であり、tivanという表記が想定される。この字については『合併字学集韻』にもt'ianという音のほかに、mianという音で収めていることから、単純に「面」などの類推によるものではなく、実際の発音に基づいた表記であるとも考えられる。

(125)「耍」は『広韻』、『集韻』に見られず、『五音集韻』に沙下切として、また、『字彙』には沙雅切として収められる。いずれも開口である。『合併字学集韻』、『西儒耳目資』では共に合口として現代北京語と同様の音である<sup>32)</sup>。『対音協字』では合口であるという点では同じであるが、声母をsと表している点が異なっている。これについては、(39)「爽」と同じようにそのように発音されていた方言音に基づいていたことが考えられる。

(126)「匙」は中古常母平声字であり、現代北京語では「匙子」という語ではtsɿ<sup>h</sup>と、「鑰匙」という語の時tsɿと発音される。『合併字学集韻』ではsɿに「匕也」として収めている。『西儒耳目資』でもsɿという音であり、『御製増訂清文鑑』では、「匙子」,「鑰匙」共にcyと記している。『対音協字』に見られるtsyという音は「慈」などと同音であり、(125)「耍」と同様に知章紐字を非反り舌音で発音する方言音に基づいた表記であると考えられる。

(127)「執」は中古章母字であり、jyという表記がこれに対応する。もう一つのdzeに対応する音は他の資料には見られず、類推によるものと考えづらい。例えば現代太原方言ではこの字がtsə?と発音されるように、非反り舌音で中古緝韻字を中舌母音で発音される方言があることから、そのような方言音を反映している可能性が考えられる。

(128)「什」は『広韻』常母字であり、sɿという音がそれに対応する。知章紐字が非反り舌音で発音される場合には、syという表記が想定されることから、それとは異なると考えられる。初期の有圈点満文資料ではsɿと書くべきところをsiと書く例も少なからず見えることから、そのような理由も考えられるが、時期が離れていることもあり、断定は難しい。

(129)「讓」は中古日母字であり、『対音協字』のžangという音に対応する。他にもšangという音が見られるが、これについては『春秋左氏伝』(成公十二年)に見える「若讓之以一矢、禍之大者、其何福之為」の「讓」について楊伯峻・徐提(1983:1026)では「借為『饜』,餽也、猶言款待」と解釈しているが、この解釈が『対音協字』の音と関連するかは不明である。

(130)「勳」は中古日母字であり、žangという表記が想定される。この字がsivangと表記されるのは「襄」などの類推によるものであろう。

(131)「櫻」は中古徹母字であり、cengという表記が想定される。他の資料にもそれに対応する音が載せられており、『対音協字』に見える音は「聖」の類推によるものだと考えられる。

32) 合口の音としては、『四声通解』においてもfuaという音で収めている。

### 3.9. 小結

ここまで『清書対音協字』に見られる漢字音について、その声母に注目して観察してきた。上に挙げた諸字及び後に取り扱う誤認などを除けば、多くの字が中古音、あるいは明末、現代音と対応する。本書には序文等が無く、どのような人物がどのような立場で記した音であるかは窺い知れない所もあるが、明らかな誤りと見られるものは多くなく、著者が実際に身につけていた、あるいは触れていた音に基づくものであったと考えていだろう。その中でも莊知二組に対する表記などは、北京音的な要素と南京音的な要素が入り交じっている様子が垣間見え、大変興味深いものである。また、他にもそれ以外の方言によると見られる音がわずかながら見られることにも注目したい。

### 参考文献

- 岸田文隆 (1994) 「パリ国民図書館所蔵の満漢「千字文」について (1)」, 『富山大学人文学部紀要』21, pp.77-133.
- 鋤田智彦 (2015) 「『満文三國志』漢字音の基礎方言」, 『中国語学』262 : pp.76-94.
- 陳曉 (2013) 「清朝の北京語の尖音團音について」, 『中国文学研究』39, pp.11-29.
- 中村雅之 (2004) 「『新刻清書全集』所収「滿漢切要雜言」について」, 『KOTONOHA』25, pp. 1 - 4。
- 早田輝洋・寺村政男編 (2004) 『大清全書 増補改訂・附滿洲語漢語索引 本文編』, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所。
- 山崎雅人 (1990) 「『〔満文〕大清太祖武皇帝実録』の借用語表記から見た漢語の牙音・喉音の舌面音化について」, 『言語研究』98 : 66-85.
- 山崎雅人 (1995) 「満漢対音資料における漢字音表記のゆれについて」, 日本言語学会第111会大会発表資料。
- 耿振生 (1992) 『明清等韻学通論』, 北京 : 语文出版社。
- 李榮主編 (1994) 『太原方言詞典』, 南京 : 江蘇教育出版社。
- 钱曾怡主編 (2010) 『汉语官话方言研究』, 济南 : 齐鲁书社。
- 楊伯峻・徐提編 (1985) 『春秋左傳詞典』, 北京 : 中華書局。
- 叶宝奎 (2001) 『明清官话音系』, 厦門 : 厦門大学出版社。
- Fuchs, Walter (1936) Beiträge zur Mandjurischen Bibliographie und Literatur. Tokyo-Leipzig: Otto Harrassowitz.
- Möllendorff, P. G. von. (1892) A Manchu Grammar. Shanghai:Printed at the American Presbyterian mission press.
- Mårten Söderblom, Saarela (2020) The Early Modern Travels of Manchu: A Script and Its Study in East Asia and Europe, Philadelphia: University of Pennsylvania Press.

### 【付記】

本稿は、日本学術振興会・2020年度科学研究費助成事業（若手研究）「満洲語文献による中国北方語音研究」（課題番号：20K13022, 研究代表者・鋤田智彦）の研究成果の一部である。